我々は何故闘うのか

国家権力－当局によるロックアウトを粉砕し
学園を学生の手に奪還しよう!!
更なる全共闘運動の豊富化を通じ大衆の手
による大衆自身の闘いを創り出
そう!!

'69.4.27 早大全学共闘会議

はじめに

―我々は何故闘うのか―

この間の情勢について

早稲田大学の全ての学友諸君！

4月26日朝5時15分を期して、学校当局は機動隊を早稲田の下に、可能な限りの機動隊を学内に導入し、しかも早稲田大学の出入口を全て封鎖した。

午前8時30分、学内掲示の布告と機動隊は一斉に引き上げたが、教職員は食堂における夜のこうしたロックアウトを協解しつつ、正本部前と本部前と左側的学友の結集の下に、機動隊撤収を抗議集会を開催した。

私達は、こうした民衆学校当局の真の意図が、私達の斗いが強大し、発作して行くのを恐れのうちにつみとってしまおうとしたのを見抜き、4月26日に予定されていた反安保加盟斗争として爆発して行く学生の斗いへの布石の意味もあった。ということを忘れてはならない。

昨年は9月以来、早稲田大学の自治活動は、民青・革マルという権力によって牛耳られて来た。若しくはそれ以外の運動は一切存在する事を許されない状態におかれていたといっていいであろう。1968年、本校系社学同の学友を学園において活動できないようにして来た革マル派は、早大反帝学評を一方的に公開の場で攻撃し、ロックアウトとバンスクで物理的に破壊し、ロ封に追い出すことによって、彼らの暴力的全学支配秩序を完成させていった。彼らの自らの路線に従わぬものは物理的に粉砕して行く、という路線は、実質的にはすでに早稲田キャンパス、二面自治新聞、学生部に現われているように、教授ハ、ハクラス長、サークル員への個撃、ラロ、バンスクによって、時にはファシストの暴力として全学に顕象していったのである。

しかも、このようにして君は革命方式で奪い取っていった自治会権力を通じて、革マル派はどんな運動を求ろうとして来たのか？それは、革マル派が口を極めてのべる当の民青の運動と何度のものではなかったのか？

いや、大衆運動の原則という点においては、むしろ民青に手ら多る運動でしかなかったのではないか。私達は、このことは革マル派の政治党派としての論理的帰結なのであると考えるが、このことについてはここで措くとして、それぞれの立場から徹底論としていただきたい。

学校当局による自治会操作

―それによって形成された学内秩序の内容 1968.12～1969.3―

こうして、学生側からの秩序形成運動を奪っていた当局は、それが確立されたと見るや、自覚的に反動派との仮面をかなぐり捨てて、露骨な権力者としての政治屋ボスを発揮して行くのである。それは、時系列―山岡路線として可能し合い路線色への党派とのボス支配線）として具体化する。彼ら当局は、一方における学内勢力としての団体民青に恐怖しつつ、当面の学内秩序保持者として依拠し、また、一方における努力としての革マル派を、革マル以外の運動の芽生えとして初期する。それは、自治会執行部として現象している故に、一学生代表として結し合いしているのだ、という言い訳として成立する。

しかし、当局の意図は、全く学内秩序の維持のために自治会執行部を通じて、自治会を操作して行くものでしかない。而も、当局はそうした秩序維持の見返りとして、支援団体会議の一環としての自治会費の値上げ、外国人事業の一環としての新校舎建設による学部移転を巡る諸問題における自治会の執行部への要求を認めていったのである。

こうした策動において、必然的に学生の斗いにおける一切の思想的動揺や、本質的な不満発酵は女活、切捨てられ、一切は党派と一部極事会の利害の問題としてかたづけられて行く。そこには、必然的に、強者の論理しか成立しないのである。

それ故、学校当局の全ての自治会、セクトと結し合う用意がある」という発言こそ、

全学生を御厚　小耳鹿にし切ったものである。といわゃるを得ない。而ち、当局にとって「読し合う」のは、どの勢力が強いかを見ることであり、最終的には、そうした、勢力の強弱によって、どことボス交して行くか、といったものでしかないからである。それは全太象の真の利益をどこ一切関係ないということだ。このことは、文連幽霊を送る当局の態度を見れば明白であろう。

而るに、昨夜当局は、革マル派が、どういう執行部のさん奪の仕方をし、いかなる人象を無視したものであったとしても、形式的において完璧しているのであれば、さしてまた、その内容が極端によるものであれ、大口、ハンチによるものであれ、大象が結集しているというのを見かねば、それを認めるとしているのである。そして、当局のそういう姿勢に対して、輒過をうけた低々のサークルは非難しても、当局は、一般的にそのようなこと正常でなければ陸上をクッ共に戻くクのみであり、現実の文連運営は、一切革マル執行部を通じてサークル支配を貫徹して行くといったものであった。「サークル員名簿を出さなければ補助金は一切出さないハ」という、当局に対して、こうして「政治過程」そのものによって、革マル派は文連形成とサークル運動の根本に関わる当局に対する名簿提出を何なおうとしているのである。こうして、当局による自治会操作は実現する。一968年12月一969年3月までの半年は、まさにこうした当局の自治会といった体制形成過程としてあったのである。

こうして、早大生がどんな矛盾を感じ、疑問を感じているのかへ無意識的にであれ、あるいはそうした矛盾や疑問をどのように変革解決し、何を変革して行くのか、ということは全く当局者の頭から消えて行く。ただただ「統手」を起こさなければ良いのである。そのためには、全ゆる手段の政治技術を駆使する。「毎月新聞」を如此に、デマ情報を流し、当局の意図を貫徹し、大象操作を行なおうとする。4月17日、革マル派は18日の「大象団交」は反故同盟合の方に、と報道機関をフルに利用して「民主的なポーズをとりながら、19日当日、「年然と革マルと団交(マシ)を当の大象の面前で行なう。「本部よりの通達通告」これは大した意味はありませんしといいながら、その日機動隊を導入する。しかも、26日機動隊導入40分前、而ち5時半頃、各友会館において、当局者と一文小山君をはじめとする数人の革マル派との話合見が持たれる。すると、一文のみには機動隊は入らない、という仕組みなのである。当局と革マル、民青のマスメディアはこうしてあらゆる他の運動をつぶすために走り始める。

こうした彼らの「政治」に対して　は何をもって応えるのか。

いや、社連の斗いそのものか、こうした「政治」に対する応えとして出発しているのに、ということを社連は明言しなければならぬ。社連が、第1に「早館斗争」といわず「ボス交」早大斗争というのは、将にそのことを意味するのである。社連は、当局や、民青や、革マルのそうした「政治」あるいは「恫喝」が引き起す一切をも斗争として斗っているのである。

それ故、当局が告示やっておれたと思って社連が何を要求しているのか解らないといっているのは全くの欺瞞である。当局は知っているはずだ。社連が当局に迫っているのは「管理運営権」を取るかとられるか、といった次元のみではなく、まさに「生き方」としての問題そのものであるということを！そうした腐敗を「政治」そのものに対してであることを！

社連は、なっきりと受取かれなければならぬ。今まで当局の言って来た「話し合い路線」とは、ものが、こうして社連が何かを要求することによって、こうして社連に何かを売ることを要求することでしかなかったことを！

社連は自らを売ることはない！

――それ故に社連は斗うのである。

我々は自分を売ることはしない。

――それ故に斗う。

全共闘について

―我々の創ろうとするものは何か―

様々な表現形態をとりつつ、こうした二重支配を突破するものとしての斗いが、4月1日以降取り組まれて来た。

4月1日、3日間の長きにわたって占拠されて来た第2学館を我々は解放した。この日解放された学館は、4月4日、全都の武装部隊を呼んでの革マル派による突入＝再封鎖によって現在使用されていない。

我々は、一般的な学館の管理運営権獲得というような問題を立てない!

4月1日学館解放斗争の意味は、全ての学生にとって学館を開放し、全ての学生が、自由に学館を占拠し、使用することを目指すものであった。そうした自由使用、自由占拠を通じながら、いかなる使用原則が最も全学生の利益に、文化運動、サークル運動、学問追求の場になるか、ということを模索し、構築して行くということこそが、我々の運動ではないか、と考える。

・それ故、4月7日以降、いつ誰によって決められたかも解らない革マル派による学館自主管理運営委員会なるものが、文連に届けなければ使用を認めないという恫喝を、学館使用中のクラス、サークルの人間に加えていったことは、まさに革マル派が、新らしい社会性を大衆自身が作り上げて行く過程に無自覚なばかりか、自らの限定されたものでしかない社会性（それは革マル派の学館問題私案に典型的に現われている）役割を果してしかいない、ということを言わねばならない。

4月10日、当局、そして革マル、民青の二重支配とその醜悪な政治レを突破するために斗かわれた本部封鎖の後、数回の討論の過程を経て、私産は早大全学共斗会議を名乗った。

しかし、このことによって早大全共斗が、東大、日大全共斗の質と全く同じものとしてあるとは我々は考えていない。むしろ、全く異質の運動体としてありつつ、全共斗を名乗っているといった方が早いかも知れないのである。

東大斗争において形成されて来た全共斗は、東大斗争を形成する必然性として生まれたのと同様、早大全共斗は、早大に現出する一切の情況を包摂し、突破し得る運動体としてあらねばならないであろう。我々は、セクト連合としての全共斗運動のイメージを解体したところから、我々の全共斗を生み出したと考える。

我々の運動は、一切の原理を相対化しつつしかも、大衆自身自立し、大衆自身の解放を新たな原理として克ち取って行く斗いであると考える。我々の地平には、一般的にいわれる左翼、右翼の区別は存在しない。自らが貶しめられている社会的諸関係に対決し、それを止揚する大衆自体による運動である。

早大全共斗には、ここからここまでが全共斗であるという枠はない。俺が全共斗であると考える人間はそう名乗り、そう運動を始めよう!

早大全共斗は、混沌とした集団であり、クラス、サークルの斗争委員会、行動委員会、諸個人の自由連合体である。

要求項目の創出と私産の現在の思想的立場について

これまでの早稲田大学における一切の運動は、自治会執行部なり、政治党派なりの一つの政治的方向から提示される一定の方針を受けて、それを討論し、それを納得するか否か（即ち、その方針に合わせて自らの行動を決めて行く）というふうに運動が形成されて来た。それはそれ自身として一つの方向性であろう。しかし、私産にとって最も私自身であるところから出発するものでなくて何の〃斗い〃であろうか？

まして、その方針が、自らを普遍（前衛）だと思い込み、それ故私産にイデオロギー注入をすることをもって、「大衆を指導する」と思い込んでいるイデオロギー宗派の社会性によって提起されたものだとしたら、それは悲劇（喜劇？）としか言いようがない。

即ち、私産の社会性はそこから一歩も出ない。せいぜい、彼らのイデオロギー的〃水準

「自己を「高める」運動でしかないのだ。お
ある態度深き前衛殿よ！

あらゆる諸個人はかけがえのない自己自身で
ありたいと願い、そこから斗いもはじまる。
その出発の位相は、あるいは市民主義的ヒュー
マニズムであるいはモラリズムであるいは絶対
や憎悪、あるいは又「科学的認識の諸結果」で
あって、一定してはいない。諸個人は諸個人の
おかれている社会的条件によって異なる位相か
ら何かに斗いを始めるだろう。私達は呼びかけ
る。「そうして自己表現（＝要求）をつき出せ
！」と。

ある社会性の表現としての政治党派の方針と、
自らの要求（＝自己表現）の方向性が合致する
時、その斗いは斗いとしての増幅効果をもたら
しはするであろう。しかし、政治方針そのもの
に於いては、自らの情念そのものを把え込むこ
とはできない。あるいはその次元にまで降り得
ないものとしての政治方針しかこれまでのもの
はなく、それを把え込み得る運動を私達が創ろ
うとしているのかも知れないのである。

私達の斗いは、どんなに、政治的に徹底的に
見える要求であろうと私達の内的必然性として
、私達の全情念を叩き込み得る要求をつくり
ることによって表明されなければならない。

そうして、その斗いの中で、より深化された
認識とより新たな社会性とをもって更の敵をあ
きらかにし、変革すべき、より新たな対象の発
見。そして更に新たな要求を創り出してゆかね
ばならない。それは対象の変革に対して、同時
に自己の変革であり、それは永続的に矛盾の根
源を止揚することを追求する斗いである。

私達の斗いは、早稲田大学そのものの中に全
ての社会的条件を集約する斗いでもある。それ
は、思想、文化の社会的存在条件そのものの変
革の運動であり、単に「個別改良斗争」なるい
われ方からする限定された斗いなどでは決して
ないのだ。そうして把え、はじめからその斗い
の中に何らの思想的教訓をも汲み得ず、又、汲
もうとしないが故に、大衆を斗わせておいて
その斗いの果実だけを取ろうとするのが革マル
派の全ての学園斗争に於ける非学派としての登
場の原因なのだ。

さて、これまでの斗いの過程で、私達がかく
とくして来た思想的根拠は次のようである。

即ち私達は、第大斗争において、ノンセクト
ラディカルと言われる部分のいう「自己表現」
を否定する。私達にとって、確かに、社会的分
業の中に組み込まれて来た自己の社会性、否、
定ということはあるが、感性的存在としての自
己自身については、これは六只的存在として
積極的に自己肯定してゆくことに外にないと思
われるのである。そうした積極的自己肯定とし
ての自己否定が、私達にとっての自己[illegible]
ない。（ゲ、ディドロ「ラモーの甥」）

又、現在の私達の思想的地平には、ボル新の
喧伝するような「第大所はしはない」

「真に根源的な思想を生み出し得る斗いとは何か？
それは君自身、後自身に問わねばならない。

何故闘うか我が

本部封鎖から第闘争委員会へ

当所と共産派によって形成されつつある課題を政治過程を通じ、当局の自治会運営を粉砕して行くために、党建設方針を共有によって斗われてきた本部封鎖は、今や、全く新たしい意味をもちつつ、更に新たな斗いを要求していると言える。

例え、26日、機動隊導入を決行した当局は、ますます反動的に出て、民青、自治会は前に立ち現われた。そして、民青、自治会はいめとする秩序派は、このような私達の斗いを共に圧殺せんと、当局と一体となった未曾有攻撃してきた。

しかし、全学生諸君を突破しつつ斗われた本部封鎖は、現在、一方における斗う学生の過程としての意味と、一方に明確に現革命に対する攻撃的機能としての2重の意味を担っている。私達は、この本部封鎖を何一つ妥協なき厳格の根拠を、建設の中へ、8号館へと拡大して行くことが、そうした本部封鎖に答える最高の斗いであると確認する。そして、その如でこの斗いの拡大と深化はなされなければならない。例え、こうした本部封鎖に加え、新らしい使用原則の確立を通して、新たな使用原則を作り出すために、斗い続けて行くことか

クラス・サークルのストライキ決議を!

更に、私達は、個別に限定されている斗いを、一挙に大衆自身の斗いとして、その再建的な意的面上を全って行かねばならない。

例ち、これまでのように、自然発生的な運動の無所の却で、斗争委員会、行動委員会を全く新らしい思想的立場の下に創造して行くことを積極的にかかって行かねばならない。私達は内的必然性としての要求(=自己実現)を自己の社会性の範囲によって、その質的変化するものであれ、更に斗うたびの要求を、全学大に示して突きつけて行かねばならない。そして、それを大衆的にビラ、立看板等で宣伝せよ!

反進的サークルは党進的サークルなりに、そうでなければサークルはそうでなかなりに、その要求によって、そうした斗争委員会入参合体を貫徹しつつ、更なる発展と変革を求め、私達は斗い抜かなければならない。

どんな要求であれ、それを尊重し、ぶつけに、本部封鎖を支えるものとして、全てのクラス・サークルでストライキ決議を上げよ!自己の要求を明確化せよ!

クラスバリケードから全学バリストへ

そして、ストライキ決議をとったクラスから、どしどしストライキに入ろう!

クラスバリケードを創り、積極的対話を作り出すなかで、私達の斗いにより質的な飛躍と拡大をかちとろう!

更に、無数のクラスバリケードを作り、そして、現執行部の秩序派ボスを明らかにしつつ、全学ストライキへと私達の斗いを発展させなければならない。

そして、私達のそうした全学ストライキをもって、第2次更大斗争を真にラディカルに突きつめようではないか!

全ての学友諸君は戦いの戦列に加われ!

資料

第2次早大斗争

69

4 28

反戦連合

東大

1.18-19 安田講堂

日大

《叛逆のバリケード》

《都市の論理》

7.7 早大宣言

フランス五月革命

68

10.21

成田
王子
佐世保

反帝全学連

6 日大全学スト

1 東大医スト

《マルクス主義と現代》

全共斗

67

10.8 羽田

9 法政処分斗争

《イデオロギー [illegible]》

「世界革命運動情報」
（文英社[illegible]）

4.16

10

66

12 "三派"全学連

3 [illegible]学館斗争

1 東大医
（インターン自立ガリ）

11 中大学館
明治学費

《現代思潮》

《自立の思想的拠点》 吉本

紅衛兵登場

65

10 日韓斗争高揚

7 [illegible]

8 反戦青年委

1 早大全バリスト

2 慶応学費スト

インターン斗争

《言語にとって美とはなにか》

10 ベ平連

8 反戦ティーチイン

3 [illegible]

〈ヴェトナム反戦運動〉